

# 検証・浦和電車区事件の真実 No.39

民主化闘争情報 [号外] 2008 年 8 月 6 日 発行 日本鉄道労働組合連合会 (JR連合)

## 第39回 7月31日、JR東日本を退職する

2001 年 7 月 13 日、Y 氏 (当該事件被害者) は浦和電車区 I 区長と K 副区長に退職を申し出た。Y 氏の意志は固く、区長は支社に上申することにした。

### もう話したくありません

7 月 25 日、I 区長は Y 氏の自宅を訪ねた。区長は Y 氏の父親と会って、Y 氏の退職に対する考え方を聞いたが、「とやかく言うつもりはない」という回答だった。区長は Y 氏に対しても「どのようないじめがあったか具体的に教えて欲しい」と尋ねたが、Y 氏は「もう話したくありません」と答えた。Y 氏が東労組の役員や組合員から集団的な恫喝を受け始めてから、半年以上が経過していた。会社には何度も助けを求めたが、Y 氏の窮状を理解してくれなかった。退職を決意した Y 氏は、「今さら話してもどうにもならない。もう思い出したくもない」という心境だった。区長には、何も話す気になれなかった。

### 区長「すみませんでした...」

その後、大宮支社から 7 月 31 日付けで退職することが正式に認められ、Y 氏の自宅に連絡があった。7 月 31 日、Y 氏は職場に出向き、区長室で辞令が伝達された。

区長が「支社より辞令が来たので伝達する」と述べ、「願いにより社員を免ずる」と書かれた辞令を Y 氏に手渡した。Y 氏は無言で受け取った。区長は「これからどうするんだ」と聞いた。Y 氏は「これから考えます」と答えた。Y 氏は、とにかく早く脅しから逃れたい一心だったので、先のことなどを考える余裕もなかった。「会社には関係ない...」とも思った。Y 氏は淡々と辞令を受け取り、事務的に受け応えをした。一刻も早く、職場から離れたかった。

一礼して、区長室から出ようとする、区長が小さな声で、「すみませんでした」と言った。Y 氏は、この言葉にハッとして、区長の方を見た。父親のような年齢の区長が、Y 氏に頭を下げていた。Y 氏は、「区長は自分を助けたかったのだろうか...」と思った。

実際、人間の尊厳を踏みにじる東労組を基軸組合と位置づけていた JR 東日本の中で、いくら現場長が努力しても、東労組に睨まれた社員を守ることもできない状態であった。当時、職場の管理権も人事権も、東労組に支配されていたといっても過言ではない。

I 区長は、2003 年 9 月 19 日に開かれた、当該事件の刑事裁判の第 8 回公判で、証人として、次のように証言している (なお、公判の様子は改めて紹介したい)。

#### 【検察官】

証人は、Y さんが自分の本心で望んで JR 東日本を退職したというふうに思っていますか

#### 【証人 (I 区長)】

思っておりません。Y さんの退職理由の内容もありまして、自分の本意ではなく、退職したのだと思っております (次号に続く)